



(2012年、ロンドン五輪会場)

『ROAD TO 2020～組織委員会／スポーツマネジャーからのメッセージ～』

「フェンシングの応援」

5月は関東学生フェンシング連盟によるリーグ戦・入れ替え戦。約20年ぶりに訪れた会場には、試合に全力を尽くす学生さんもいれば、声援を送って勝利の一助になられている支援者も多くいらっしゃいました。

私が学生の頃は、部員のほとんどがピスト両端にあるチームベンチを囲んで応援し、監督コーチは選手に対し、声を振り絞って指示を出したりしていた記憶があります。

今は国際ルールに倣ってか、FOP（フィールド・オブ・プレー）に入るメンバーの人数を制限したり、監督もプレー中は温かく見守り、1分間のブレイクタイムや選手交代の時に静かにアドバイスをする姿が増えているようにも見受けられます。

フェンシングの面白さは、プレーそのものだけではなく、選手と指導者の関係性が試合中に見られるところにもあります。二人三脚の並列関係であったり、師弟関係であったり、親子関係であったり。これらの

関係を、観客席から垣間見ることができるのです。団体戦になれば、選手間の絆やチームワークが、いかに試合の流れに影響するかも見ることができます。

また近年は、選手や監督周りだけでなく、観客による応援の仕方も変化しているように感じます。例えばロンドン大会とリオ大会。

フェンシングの場合、審判が号令をかけた瞬間からなんらかのアクションでランプが付くまでのプレー中には、静かに応援することが多いです。審判の声が聞こえるように、選手の集中を妨げないように。卓球やテニスの応援と似ています。

ロンドン大会では、これまでの応援文化のとおり、プレー中は静かに見守り、プレー以外のタイミングで大きな声援を送る。相手のミスや失点に拍手しない。敵味方や国籍問わず、素晴らしいプレーには拍手をする。それこそ男子フルーレ団体のメダル争いでは、日本の選手たちの素晴らしいパフォーマンスや姿勢に観客の誰もが国籍問わず感嘆し、温かい雰囲気に含まれていました。

一方リオ大会では、会場はサッカースタジアムにいるような応援を繰り広げていました。観客も試合に参加し、会場全体が一つになっているような空間ができあがっていました。審判の号令前やプレー中も声援は続き、「Silence Please」というメッセージがスクリーンに映し出されているものの、全く効果はなく。時には相手選手の失点やミスにも拍手が広がったり、審判の判断にブーイングがあったりもしました。ホーム・アウェイによるアドバンテージ・ディスアドバンテージが少なからず影響していた大会だったように感じました。

「観客の応援は国民性やその国のスポーツ文化をあらわし、それによって競技会場の雰囲気だけでなく試合の流れさえも変える力がある」と、思い知った瞬間でした。

日本で開催されるオリンピックのフェンシング競技大会。皆さんはどのような会場を想像されますでしょうか。エペ・サーブル・フルーレといった種目によって、個人戦あるいは団体戦の日によって、それぞれ雰囲気が変わろうかと思えます。

日本には素晴らしい応援文化があります。日本独特の応援団やチアリーディング、プロ野球やJリーグ等で繰り広げられている応援合戦。

今、多くのフェンシングの試合やイベントが国内で計画されています。是非ともお近くの会場に足を運んでいただき、日本ならではのフェンシングの応援の形を創り出して頂きたいです。800日後、幕張メッセで繰り広げられる応援の姿が、2020年以降のレガシーとして残りますように。